

元和3（1617）年の‘a Canterbury tale’

海老久人（名誉教授）

‘A Canterbury tale’ imported to Japan in 1617 during the Age of Great Navigation

EBI Hisato

1. はじめに

日本にはじめて「チョーサー（Chaucer）」というイギリス人名がもたらされたのは、幕末文久元（1861）年のこと。長門温知社から刊行された『英國志』巻之四「^{ヘンブリッキ}顯理第五紀」に「高門士召色爲斯比格」と刻されている。¹「召色」がチョーサーの漢名にあたるが、ここでのチョーサーは、1414年の議会で下院（庶民院）議長に選出された詩人の息子トーマス・チョーサー（Thomas Chaucer）のことである。『英國志』は、「耶蘇降世一千八百五十六年」に上海で刊行された漢訳『大英國志』の翻刻本で、幕末期にあってもっとも詳細な英国史だった。漢訳者は、清朝上海で宣教活動をしていたイギリス人ウィリアム・ミュアヘッド（W. Muirhead; 漢名 慕維廉 [Moó Wei-lien]）で、トーマス・ミルナー（T. Milner）の原著から漢訳した。「召色」に該当する原文は ‘The commons in this parliament, (1414,) after electing Thomas Chaucer, the son of the poet, as their speaker’ である。²

次にチョーサーの漢名が紹介されるのは、明治3（1870）年の中村正直訳『西國立志編』である：

英國歌詩ノ父ト稱セラル^{チヨウサフ}ハ、始メ歩兵ニシテ、後ニ^{ウンジヨウシヨ}税館ノ官長、及ビ王家ニ屬スル山林田園ノ^{カシラ}監督トナリ、ミナ功效ヲ顯ハセリ³

原文は、サムエル・スマイルズ（Samuel Smiles）の ‘Chaucer was in early life a soldier, and afterwards an effective Commissioner of Customs, and Inspector of Woods and Crown Lands’ である。⁴ 中村の「朝色」とは、先の「召色」の父で詩人ジェフリー・チョーサー（Geoffrey Chaucer）のこと。ただ、原文にはない「英國歌詩ノ父」という頌辞を付したことで中村訳は出色だ。‘The Father of English Poetry’ は1700年のジョン・ドライデン（John Dryden）にさかのぼる詩人チョーサーの枕詞である。⁵ もちろん中村がドライデンを知るよしもない。後年、石井研堂は中村正直伝の中で、「予の英文を読む力は、ニウセリウスの小英國史一冊を精讀せしに外ならず」という中村自身の回想を紹介している。⁶ この「ニウセリウスの小英國史」とは英国国教会派「キリスト教知識普及協会」（SPCK）が出版した *English History* “New Reading Series”（London, [?1858]）を指すが、中村が帰国後静岡でスマイルズの翻訳に着手するのとほぼ同じ時期

に渡部一郎（温）によって翻刻されていた。そこに ‘In this reign [of Edward III], also arose our first great English writers the poets Chaucer and Gower’ とあり、チョーサー頌辞の手がかりとなったのかもしれない。⁷ もう一つの手がかりとして、同協会出版による *The History of England* (London, 1848, 1854) があり、‘Chaucer, the father of English poetry, passed great part of his life at Edward’s court’ という文言がある。⁸ ロンドン滞在中であれば、「ニウセリウスの小英國史」より更に詳しい *The History of England* のほうを中村が手にとった可能性はある。

上記の漢語固有名「召色」と「朝色」がもたらされる間の明治2（1869）年に本格的な詩人論としてチョーサーが紹介されている。これが日本における詩人チョーサー紹介の嚆矢である。河津孫四郎譯述『西洋易知録』の以下の記述だ：

ボッカシオ 千三百十三年フロレンスに生る○其著せる「ラテセード」〔詩名〕といへる詩篇は始めて任侠の事を作りし詩なりシャウセル其詩に基きて義士詩談を作れり○然し此の人は詩よりも特に文章に巧となりし○其著す所「デカメロン」〔書名〕といふ小説あり一百條の物語を集めたるいと面白き書なり○千三百八十四年〔マ〕に死す
シャウセル 千三百二十八年^{ロンドン}倫敦に生る○英^{イギリス}詩の大家なり○イドワルド第三リチャルド第二に仕へたり○著す所義士詩談なり○千四百年死す⁹

原文はW. Collier, *The Great Events of History from the Beginning of the Christian Era to the Nineteenth Century* の次の記述：

Boccaccio, born 1313, in Florence – the author of the earliest chivalrous poem in Italian, “La Teseide,” from which Chaucer took the Knight’s Tale, but more remarkable as the father of Italian prose – chief work the “Decameron,” consisting of one hundred tales – died 1375.

Chaucer, born, 1328, in London – the first great English poet – lived at the courts of Edward III. And Richard II. – chief work, the “Canterbury Tales” – died 1400.¹⁰

The “Canterbury Tales”に該当する日本語訳はないが「義士談」、つまり、‘Knight’s Tale’がボッカチオ作『テセイダ』を種本だとする出典研究の一端がすでに紹介されている。

こうして日本におけるチョーサー受容史を幕末から明治初年にかけて概観したが、さらにさかのぼり、江戸初期元和3（1617）年にチョーサーの『カンタベリー物語』が日本にもたらされたのではないかと議論された一時期があった。議論は、チョーサーの作品名ではなく、普通名詞で「無駄話」というほどの意味だったとわかり、一応収束している。しかし、この議論では‘a Canterbury tale’がなぜ、どうして「無駄話」という意味になるのかという語義の変質、そして、さらに本質の問題であるはずのチョーサー評価の変遷という問題は未解決のままだった。本稿は、*the Canterbury Tales* の評価をめぐる歴史の変遷をたどり、イギリス人リチャード・コックス（Richard Cocks, ?1565-1624）が日本にもたらした大航海時代の‘a Canterbury tale’の意味を検証する。

1 論争の発端

事はある偶然から始まった。

大阪朝日新聞社が創刊五十年を記念して、昭和4（1929）年3月10日から約一ヶ月にわたり「開國文化大展覽會」を開催し、平行して3月20日から「開國文化講演会」が朝日会館で実施された。講演会二日目の3月21日、「長崎縣立圖書館長永山時英氏急病のため折り柄來阪中の長崎高商教授武藤長藏氏代つて『日英交通史概観』と題して」急遽登壇することになった。¹¹ この講演録はすぐに『開國文化』に掲載され、武藤は

以下のように記す：

彼【リチャード・コックス】は又英文の *Essaies* を Raphe Wilson から受取つて持つて居つたとの事であります。
 (彼の日記千六百十七年一月九日の條参照) 又彼は Chancellor^{ママ} の a Canterbury Tale 等を話して居ます
 (千六百十七年七月二十一日の條参照)
 又 Edward Maunde Thompson 編纂 *Diary of Richard Cocks Vol. I. Preface* 参照¹²

武藤はコックスが平戸へ舶載してきた書物一覧を紹介する文脈に 'a Canterbury Tale' という字句を置いたことが論争の発端となった。厳密な考証で知られる武藤が原著『コックス日記』の編者トンプソンの 'But we need not assume that he (R. Cocks) had read Chaucer because he calls a long rambling statement a Canterbury Tale' (Preface, p. xliv) を十分に読み解かなかつた。武藤の講演は、チョーサー作『カンタベリー物語』が江戸時代初期の元和3年に日本へもたらされていたという説を拡散することになった。

コックスは慶長18 (1613) 年11月から元和9 (1623) 年12月まで平戸イギリス商館長の任にあつた。在任中に書かれた日記に次の一節がある：

[1617] July 21,-- The kings brother, Tonomon Samme, sent for me to make an end of my process with the scrivano of Giquan, whome I fownd accompanied with the boateswane of the junk and the China, Giquans Kynsman, with an other fellow who cleamed 120 picos sappan of our wood, but had no papers to shew, but tould a longe Canterbury tale.

1617年7月21日 藩主松浦隆信殿の弟信辰殿が、故ギクワン船長付き会計担当者との懸案を解決するよう私をお召しになられた。この担当者のことは【「海洋冒険」号】船長と故ギクワン氏の中国人縁者と一緒にいたことは私も知っていたし、この会計担当者にはもう一人、我らの船荷である赤色染料用蘇芳120ピクル【120 x 60kg】を要求するが、提出すべき肝心の書類を持参せず、埒もない無駄話をするだけの者ひとりも一緒だった。¹³

‘[T] ould a longe Canterbury tale’ の解釈が論争に火をつけた。論争史を以下の年表にまとめておく。

別表I

年	著者／著書名・論文題目
明治 16/1883	(1) Edward Maunde Thompson ed., <i>Richard Cocks, Cape-Merchant in the English Factory in Japan, 1615-1622 with Correspondence</i> 2 vols. (New York, 1883) , I, p. xliv and p. 282.
明治 40/1907	(2) 鷗村櫻井彦一郎「日本に於ける英語史」『英文新誌 <i>The Student</i> 』第4巻7, 8号 (英文新誌社)、203-207頁のうち203頁。
大正 14/1925	(3) Georg Borchardt, <i>Schreibung, Aussprache und Formenbau im Tagebuch des Richard Cocks (1615-1622)</i> (Gießen, 1925), p. 4.
昭和 4/ 1929	(4) 3月21日、武藤長藏の講演「日英交通史概観」、および講演録の刊行本『開國文化』(朝日新聞社)、446頁。
昭和 6/1931	(5) 竹村覺「徳川時代の英文學」『英文學研究』第11巻2号 (日本英文學會)、202-230頁。
昭和 7/1932	(6) 竹村覺「徳川時代の英語研究 (特にその發音について)」『英語青年』Vol. LXVI-No. 7 (研究社)、234 - 235頁。
	(7) 重久篤太郎「明治以前の西洋文学伝来考」『同志社文學』第5巻第3号 (同志社文學會)、335-346頁のうち344頁。しかし、同論文はその後『日本近世英學史』(教育圖書、1941年)に再録されるが、該当箇所は全面削除された。

昭和7/1932	(8) 豊田實『日本に於ける英文學研究』(岩波書店)、5-6頁。
昭和8/1933	(9) 武藤長藏「日英交通史」『經濟學全集』第28卷(改造社)、317-412頁のうち385頁。上記(4)を踏襲。
	(10) 竹村覺『日本英學發達史』(研究社)、49-56頁、167-172頁。卷末「日本英學發達史年表」の「元和三年(1617)」(289頁)の項に「○Geoffrey Chaucer: <i>Canterbury Tales</i> 傳へらる。」と記載。
昭和9/1934	(11) M.T. [豊田實] 書評「竹村覺著『日本英學發達史』」『英文學研究』14巻1号(日本英文學會)、111-115頁。
昭和10/1935	(12) 武藤長藏「初期日英交通史の重要文獻」森莊三郎編『經濟学の諸問題: 河津教授還暦祝賀記念』(有斐閣)、1-84頁のうち64-66頁。自説を全面修正し、豊田への謝辞も付す。
	(13) 竹村覺「日本英學史」英語英文學刊行會編『英語英文學講座』(英語英文學會)、3-44頁のうち7頁。
昭和12/1937	(14) 武藤長藏『日英交通史之研究』(内外出版印刷、初版)「第一編 日英交通史概観」、63-64頁では昭和4年の講演録(『開國文化』所収)の誤植や‘a long Canterbury tale’を「長話」と修正して再録。また同書「第三篇 初期日英交通史の重要文獻」第三章第二節、631-633頁では上記(12)が再録。
	(15) 定宗數松『日本英學物語』(三省堂)、7-9頁。
昭和14/1939	(16) 豊田實『日本英學史の研究』(岩波書店)、358-360頁で、新たに本年表中(3) Georg Borchardt 論文を紹介。
昭和16/1941	(17) 武藤長藏『日英交通史之研究』(内外出版印刷、増補再版)「第一編 日英交通史概観」、64-65頁で昭和4年の講演録(『開國文化』所収)の誤植などを修正して再録。また同書「第三篇 初期日英交通史の重要文獻」第三章第二節、638-640頁で上記(12)が再録。
昭和17/1942	(18) 武藤長藏『日英交通史之研究』(内外出版印刷、増補第3版)。(14)、(17)に同じ。
昭和30/1955	(19) 佐野英一「初期訪日英人の日記」『成城文藝』第2号(成城大学文藝學部)、69頁。
昭和38/1963	(20) 豊田實『日本英學史の研究』(千城書房、新訂初版)、264-265頁。
昭和42/1967	(21) 皆川三郎『平戸英国商館日記』[増補改訂](篠崎書林、増補版)、227頁。
昭和49/1974	(22) 同上「William Adams 研究」『英学史研究』1975年巻7号(日本英学史学会)、63-64頁。
昭和57/1982	(23) 竹村覺『日本英學發達史』(名著普及会)。
昭和60/1985	(24) 玉井美枝子「本邦初訳の『カンタベリ物語』」『英学史研究』1986年巻18号(日本英学史学会)、115-127頁のうち115頁。
平成4/1992	(25) 後藤政次『日本英語教育史研究序説-英学物語資料』(山口書店)、5-7頁。

論争に決着をつけたのは「オックスフォード大辭典」(*NED/OED*)を検証した豊田実で、‘Canterbury’が限定語もしくは名詞修飾語で、‘Canterbury tale」という慣用語法であることを証明した。そして、豊田は‘tale’が小文字であることも指摘しているが、更に言えば、単数形でもある：

このCanterbury taleはオックスフォード大辭典がCanterburyのattributive useに説明してある一義a long tedious storyに當り、要するに「長話し」の意と思はるゝ。且つtaleのtが小文字になって居ることに注意す可きである。即ちコックスの日記中のこの句は英語の慣用語法に屬するもので、もとカンタベリ詣での巡禮達がお互の無聊を慰めるために長い物語をし合ったことから出たものである意味においてチョオサアの物語と同じ背景を有しては居るが、チョオサアのカンタベリ物語中の一つの意ではなく、前記の意味であると思ふ。¹⁴

武藤自身は昭和8年〔〈別表I〉(9)〕でも、依然、昭和4年の講演録を修正せず、誤植もそのまま再録している。しかし、昭和10年以降〔〈別表I〉(12)(14)(17)〕、自説を全面的に修正し、豊田への謝辞も加

えている。一方、竹村覚は元和3年を *The Canterbury Tales* の日本伝来初年とする自説を最後まで変えず、豊田説を「異説」とした：

第一に打上げられた名花は、Geoffrey Chaucer (1340?-1400) の美しい物語 *The Canterbury Tales* である。それは Chaucer が、この物語を作ってから約二百三十年後の元和三年 (一六一七) 〈中略〉 *Canterbury Tales* を、最初に傳へたのは、家康在世当時、英國が家康の許可を得て、九州平戸に「平戸英國商館」を置いた、最初の商館長 Richard Cocks である。年號は、前記元和三年、彼の日誌七月廿一日の條に a Canterbury Tale と出てゐるのが即ちそれである。¹⁵

‘[A] Canterbury tale’ を *the Canterbury Tales* と解釈した竹村に先行して、すでに大正14 (1925) 年にドイツ人 G. ボルクハルト (Georg Borchhardt) も「彼 (コックス) はチョーサーを知っている」という立場をとっていた。背景には、コックスの上司でイギリス東印度会社総裁トーマス・ウィルソン卿 (Lord Thomas Wilson) から国王ジェームズ一世への報告に「かの男 (コックス) は、学問こそありませんが、誠実で相応の年齢で分別のある人物」という文言があった。ボルクハルトはコックスの教養の高さを擁護しようと『日記』中当該日付の記述を引用し、彼がチョーサーを知っていることになった。¹⁶ 皮肉なことに、コックスが生きていたエリザベス朝期はチョーサーがもっとも人々の記憶から遠ざかった時代だった。トーマス・スペート (Thomas Speght) が、古語となり廃語となったチョーサー英語の理解を助けるために、はじめて、グロサリーを添えたチョーサー作品集 *The Workes of our Antient and learned English Poet, Geffrey Chaucer, Newly Printed* を出版したのが1598年で、1602年に増補版が出版されたものの、1687年に第三版が出版される85年間はチョーサーの作品はまったく顧みられることはなかった。豊田自身はチョーサー研究の専門家でなかったが、逸早くボルクハルト論文の間違いを指摘していた。¹⁷

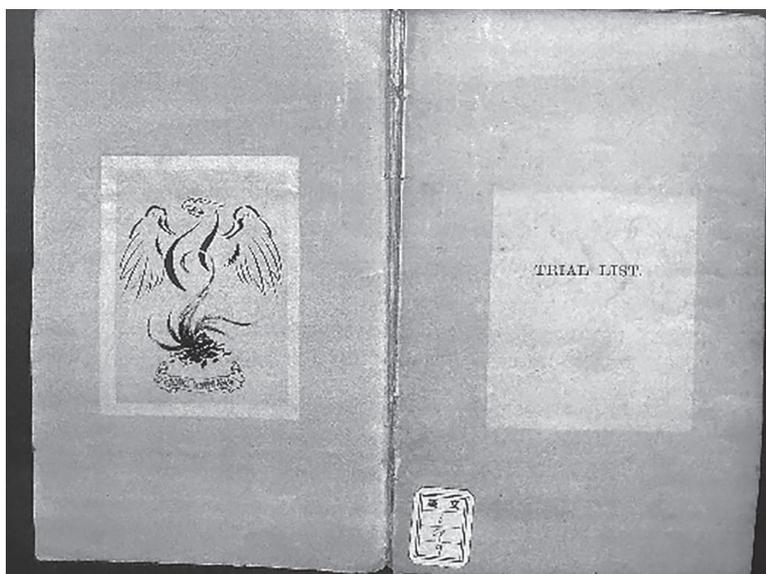
ところで、明治40年、当時の日本に於ける英語受容史を概観した桜井彦一郎 (鷗村) はすでに「Shakespeare時代の英語が、我國のドコカで用ゐられ、(現に長崎にはRichard Cook [ママ] の如き商人もみた)」と指摘している。桜井の指摘どおり〔別表I〕(2)、『コックス日記』はエリザベス朝初期近代英語で書かれ、綴字や語義も近現代英語の辞書だけでは正確な理解はできない。*NED/OED* といった語彙の歴史の変遷をたどる辞書が必携だった。¹⁸

管見のかぎりであるが、*NED/OED* の情報を本邦へ逸早く伝えたのは上田敏であろう。明治28 (1895) 年、東京帝國大學文科大学英吉利文學科二年生の上田が、みずからも創刊に加わった『帝國文學』誌に「大辭書の出版」を寄稿。さらに、明治33 (1900) 年、東京高等師範學校教授の上田が同誌寄稿「英辭書の古今」の中で「新撰英辭書 *A New English Dictionary*」成立の詳しい情報を掲載している。¹⁹ 明治45年発行の『英語青年』には「中學校に Oxford Dictionary. 専門の英語學校、専門の英學者ですら Oxford の *New English Dictionary* を備へ居る者少なく大抵は *Concise Oxford Dictionary* で間に合はして居る、が都下では第一中學にはチャント *New English Dictionary* が備へて居る、地方では安房中學にも此辭典があるさうだ」という記事がみえるが、昭和初年の研究環境下でも *NED/OED* を検証しえた豊田の見識は例外としていだろう。²⁰ ただ、武藤の名譽のために書き添えると、昭和10年の論文「初期日英交通史の重要文献」で「牛津大辭書」(1893年刊行) “A *New English Dictionary on Historical Principles* Edited by sir James Murray” Vol. II C. p. 80’ を引証し、その見出語 ‘Canterbury’ を根拠に自説を修正した。加えて、同じ『コックス日記』を正確に理解するために W. W. Skeat, *An Etymology of English Language* を援用した。たとえば、‘taking his bill for payment’ の従来の訳語「支拂手形を受取り」を誤訳だとし、『カンタベリー物語』「商人の話」1937行の中英語 ‘bille’ と同義の「證書」だと指摘している。²¹

II. チョーサー評価史

昭和初期、日本で‘a Canterbury tale’の解釈をめぐる論争が活発だった。ただ、英語英文学者は誰一人この論争に加わらず、英学史学界と英文学界との学界・学域の分断が見て取れる。語義解釈が本文理解に重要であることは言をまたないが、実は、本質的な問題は、コックス来日当時、大航海時代の16、17世紀にチョーサーがどう評価されていたかであり、それを背景に‘Canterbury’の語義が歴史的にどう変質していったのか、この問題こそ検証されるべきだった。

見出語‘Canterbury’がNED分冊版 Section ‘C-Cassweed’に収載、出版されたのが1888年6月だった。その半年後、F. ファーニヴァル（Frederick Furnivall）は*The Academy*誌にチョーサー再評価事業の編集者募集広告を出す。²²これに応募してきたキャロライン・スパージョン（Caroline Spurgeon）が1901年にファーニヴァルと直接会い、チョーサー評価変遷史作成に着手した。スパージョンの業績は、16、17世紀のチョーサー評価史についても、‘Canterbury’の語義の歴史的変質についても明確な検証結果を示していた。



C. Spurgeon, *TRIAL LIST* から見開き頁。左図は市河三喜の蔵書票「不死鳥」（東京大学「市河文庫」所蔵から）。

筆者の手元に東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室のご厚意で許可された *TRIAL LIST with a Temporary Introduction for Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion (1400-1900)* Compiled by Caroline F. E. Spurgeon, Associate of King's College, London. ‘The Chaucer Society, Second Series’ No. 33 (London: Published for the Chaucer Society by Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Paternoster House, Charing-Cross Road, 1901) のコピーがある。市河三喜旧蔵で東京大学へ遺贈されたものである。市河文庫蔵書

目録（Sanki Ichikawa, *Catalogue of the Library of Sanki Ichikawa Part I English and Comparative Philology* [Tokyo: Privately Printed, 1924], p. 130）に記載がある。筆者の調査では、British Library など欧米の主要図書館の所蔵目録からも、チョーサー批評書の書誌一覧からもこの書名は脱落している。「試行版」ということで正規の文献として扱われなかったのか。不明である。しかし、この「試行版」こそ、後の「正規版」とも言うべき分冊版 Part VI; Introduction (1924)、さらに、合冊された3巻本 *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion (1357-1900)* の第一巻（Cambridge, 1925）所収 ‘Introduction’ の、いわば、胚芽である。今問題としているチョーサー評価史の枠組みは「正規版」に継承され、もっとも早い時期のスパージョンの考え方を示すものとして、筆者はこの「試行版」こそ重要な文献だと考える。チョーサー評価の変遷を6段階に分け、第三、第四段階の16、17世紀に変換点を迎えることを、まず「試行版」は以下のように提示している：

- (3) Critical discussion, beginning with the Elizabethans. – Praise of Spenser. – General agreement as to irregularity of Chaucer’s versification. – The various critical attitudes of the Elizabethans as exemplified by (1) Spenser, (2) Sidney and Webbe, (3) Gascoigne, and (4) Speght.

(4) Neglect of Chaucer in the 17th century. – General belief that he was too antiquated to endure, as expressed by Daniel. – Condemnatory remarks by Waller and Addison. – Chaucer is no longer the greatest poet, but deserves respect because of his age and his service in 'refining' the English tongue....²³

一方、「正規版」は以下の通り：

(3) The critical attitude, which begins towards the end of the sixteenth century with the Elizabethans....Now, however, begins to creep in that general belief which clung so persistently to the minds of all writers of the seventeenth and eighteenth centuries; that Chaucer was obsolete, that his language was very difficult to understand, his style rough and unpolished, and his versification imperfect.

(4) During the seventeenth century this belief gains so much ground that Chaucer's language is said to be an unknown tongue; the knowledge of his versification entirely disappears; for eighty-five years (1602-87) no edition of his works is published, and his reputation altogether touches its lowest point.²⁴

論点の提示は「正規版」が詳しいが、「試行版」の敷衍とみなしてよい。いずれにしろ、リチャード・コックスが生まれ育ち、日本へ来た大航海時代はチャーサー評価が大きく「負」の方向へ転換する時期と重なっていた。そして、日本でコックスの 'a Canterbury tale' が議論される昭和4年からさかのぼること5年前、1924 (大正13) 年には、たとえ「試行版」にせよ、スパージョンの著書が日本の市河の手元にあり、豊田実が市河の書棚から借り出したボルクホルトの著書とともに手にとる可能性があった。残念だが、実際はそうならなかった。さらに、スパージョンの分冊版7冊は、すでに1932年から1934(昭和7~9) 年にかけて東京帝国大学附属図書館に備えられていたが、英文学研究者のだれかが援用して、'a Canterbury tale' 論争に的確な助言をすることもなかった。

スパージョンは、分冊版最終号 Part VII 'Index' (1924) にわざわざ見出語 'Canterbury story, or Canterbury tale' とその語義解釈と使用例を掲げた。語義解釈については *NED* よりさらに細い定義に分類している。²⁵ *NED* は限定詞 'Canterbury' の使用例を (a) 'Canterbury bells', (b) 'Canterbury tale or story', (c) 'Canterbury trick' に分け、使用初出年と初出例を '?1550 in C. Wordsworth *Eccl. Biog.* (1818) ' としている。初出以後の使用年と使用例は8例で、合計全9例となる。²⁶ 一方、スパージョンは見出語 'Canterbury story, or Canterbury tale' を掲げ、語義解釈を (1) a fable, (2) a frivolous story, (3) a dull and long-winded fiction に細分化し、使用年と使用例は (1) で13例、(2) で3例、(3) で6例、合計22例となる。なお、*NED* の '?1550 in C. Wordsworth *Eccl. Biog.* (1818) ' と同一出典を、スパージョンは単独で見出語 'Wordsworth, C., *Ecclesiastical Biography*, 1810' として掲げている。²⁷ '1818' と '1810' は出版年の違いである。

ただ、*NED* もスパージョンも、1617年のリチャード・コックスの 'a long Canterbury tale' を使用例として採用しなかった、もしくは、できなかった。また、基本的なことだが、限定詞 'Canterbury' 初出使用例について、両者ともに1993年に出版されたウィリアム・ソーブ (William Thorpe) の校訂本を利用できない状況にあった。²⁸ 結論を先に示すと、限定詞 'Canterbury' の初出使用例は、1407年、ウィリアム・ソーブ (William Thorpe) による異端審問での証言だった。²⁹ さらに、*NED* には引用文の致命的誤植がある。*NED* 以降継承されてきた *OEDOnline* ではその誤植が修正されることが望まれる：

現 *NED/OEDOnline*:

Canterbury ('kæntəbəri, -bəri), sb. /**Canterbury**, adj. and n.:

A. attrib./ A. adj. attributive.

?a 1550 in C. Wordsworth *Eccl. Biog.* (1818) I. 168 Pilgrimes..with the noise of their piping, and with the sound of their singing, and the jangling of their Canturburie bells. (誤植箇所太字は筆者)

修正私案 *NED/OED*Online:

1407 Thorpe, W. The Testimony of W. Thorpe (1993), 64 Pilgrims.. wip **noyse of her syngyng**, and wip **pe soun of her piping**, and wip pe ginglyng of her Cantirbirie bellis.³⁰ (修正案太字は筆者)

ソープの ‘Cantirbirie bellis’ は、巡礼や巡礼者を告発する文脈で使われ、チョーサーの ‘the Canterbury Tales’ の ‘Canterbury’ が反キリスト教的不敬を含蓄する意味へ変質していく。つまり、変質の淵源は、結局、このロラード派聖職者の言説に行きつく。

1386年から1855年まで、名詞修飾語 ‘Canterbury’ の全使用例31件を調査すると、16、17世紀のものが21件にのぼり、宗教関連本が16世紀に集中し8件となる。なお、見出語 ‘Canterbury’ の16、17世紀使用例について、*NED/OED*とスパージョンのデータを基に、私案も加えて、新たに再編したものを〈別表II〉としてまとめておいた。

16世紀は、チョーサーが詩人からウィクリフ主義者、宗教改革者へ姿を変え、好悪両方の評価が同時に存在する興味深い時代でもあった。チューダー期、ヘンリー八世がローマカトリック教会から離脱するきっかけを作り、トマス・クロムウェル (Thomas Cromwell) が英国宗教改革を推進し、エドワード六世がそれを引き継ぐ時代である。カトリック教徒の女王メアリーの在位期間 (1553-1558) をのぞき、その後のエリザベス女王も宗教改革を推進していった。

スパージョンによるチョーサー評価史変遷の第三、四段階に相当するこの時代を検証してみる。まず肯定的言説について、古典語学者であると同時に母語 (英語) 愛者でもあったロジャー・アスカム (Roger Ascham) は1544年に『弓術愛好家』 (*Toxophilus*) で寓意〈弓術愛好家〉 (*Toxophilus*) の口を借りて、チョーサーを「イギリスのホメロス」 (*English Homer*) になぞらえる。そして、『カンタベリー物語』の「教区主任司祭の話」 (*the Parson's Tale*) と「贖宥証取扱人の話」 (*the Pardoner's Tale*) から多くの教訓を引き出している：

The Nource of dise and cardes, is werisome Ydlenesse, enemy of vertue, ye drowner of youthe, that tarieth in it, and as Chauser doth saye verie well in the Parsons tale, the greene path waye to hel, hauinge this thing appropriat vnto it.... [W] hose horribleness is so large that it passed the eloquence of oure Englyshe Homer [Chaucer], to compasse it: yet because I euer thought hys sayinges to haue as mucche authoritie, as eyther Sophocles or Euripedes in Greke, therefore gladly do I remembre these verses of hys.

Hasardry is very mother of lesinges
And of deceyte and cursed sweringes
Blasphemie of Christ, manslaughter, and waste also,
Of catel of tyme, of other thynges mo.³¹

青春にどっぷりつかり、溺れる者よ、サイコロもカードも賭博は退屈なく怠惰の乳母なのです。そして、チョーサーが「教区主任司祭の話」【注：ll. 710-716】で的確に指摘しているように、〈怠惰〉こそ地獄へ通じる緑色の逸楽の道で、地獄の属性をもつのです。〈中略〉[賭博の] 恐ろしさはとても大きくて、我らがイギリスのホメロス [たるチョーサー] の雄弁をもってしても語り尽くせなかったのです。でも、彼の言葉にはギリシャのソフォクレス、あるいはユウリピデスにも匹敵する権威があると思ったので、ここで彼の詩文の一節をよろこんで思い出してみました：

サイコロ賭博こそ、嘘つきと欺瞞の
産みの母、それに忌まわしい偽証で、
キリストへの冒瀆で、人殺しとおなじ。財産と
時間とその他諸々の浪費とおなじ。
【「贖宥証取扱人の話」、ll. 591-194】

さらに、ブラディ・メアリー (Queen Mary) の迫害を逃れ、ヨーロッパでの亡命生活から帰ったジョン・フォックス (John Foxe) は『殉教者行伝と記念碑』第二版 (*Acts and Monuments*, 1570) で、チョーサーにプロテスタントの姿を認め、「正統なるウィックリフ主義者」(a right Wicleuian) とまで言っている。³² この第二版第一巻にはロラード派僧侶で巡礼を否定するウィリアム・ソープの証言集も含み、片や、チョーサーのカンタベリー巡礼を肯定するフォックスの同時代聖職者とは対照的と言わなくてはならない。

一方で、チョーサーの作品を読まずに、批判的評価も同時に進行していた。ヘンリー八世の忠臣クロムウェルの意を体し、国内修道院をくまなく視察したヨーク大聖堂参事会長リチャード・レイトン (Richard Layton) は1535年にバース修道院から書簡を送り、修道院の退廃ぶりを報告している。「貴下のもとに『聖母マリア奇蹟集』をお届けしましょう。私がこの(バース修道院の) 図書館で見つけた『カンタベリー物語』にも匹敵するものです」と結んでいる。³³ ここでの『カンタベリー物語』には、修道院にはふさわしくない蔵書という非難が込められている。1549年、エドムンド・ベッケ (Edmund Becke) は英訳聖書 *the Matthew Bible* の改訂版を出版するに際して「前書き」を掲げ、その中で「行政にたずさわる者も貴族たる者もすべからく、『年代記』や『カンタベリー物語』にやってきたように、一日の普段の仕事のうち1, 2時間ほどでも割いて、この書物(聖書)を読む時間にあててくれれば、必ずや彼らは神への罪も無闇な誓言の不敬罪も博打もやめることになるのだ」と皮肉を込めて忠告している。³⁴ さらにこの年、カトリック女王メアリーの治世下で殉教者となるトーマス・克蘭マー (Thomas Cranmer) とヒュー・ラティマー (Hugh Latimer) の言説でも 'Canterbury tale [s])' が「つまらない話」と同義語へ変質している。

アスカムの『弓術愛好家』は版を重ね、フォックスの『殉教者行伝と記念碑』第二版も19世紀まで版を重ね、読み継がれていったことを考慮すれば、『カンタベリー物語』の同時代性にたいする肯定的評価が持続していったことは確かだ。しかし、フォックスと同じ時代の同じプロテスタントの聖職者を中心に、否定的評価が定着していったことも事実である。16, 17世紀の傾向を見る限り、聖俗を問わず、否定的評価が優勢になっていった。

この否定的評価が生まれる背景には二つあり、一つは直接的原因となったウィリアム・ソープの証言集に記載された巡礼行そのものを流神行為とするロラード派の言説で、今一つは16, 17世紀におけるチョーサーの英語自体が古語、廃語となり人々の理解をさまたげていた言語環境もあった。ここではまず、チョーサー死後百年、二百年と時間が経過し、英語が変化する過程でチョーサー受容も変化せざるを得なかった特徴的傾向を検証しておく。

1546年に翻訳家ピーター・アシュトン (Peter Ashton) が英訳版『トルコ年代記小論』で「私は、(時代の古さから今では使われない) チョーサーの言葉や、ラテン語衰退のため普通の人ではもう理解できない(いわゆる) ^{インク・ホーン} 学者ぶった言葉より、平易で親しみのある英語使用を学習した」として、チョーサー英語の現状を率直に指摘している。³⁵ そして1598年にはトーマス・スペートがこのチョーサー英語の現状を踏まえて、読者に向けて:

Some few yeers past, I was requested by certaine Gentlemen neere friends, who loued Chaucer, as he well deserueth; to take a little pains in reuiuing the memorie of so rare a man, as also in doing some reparations on his works, which they iudged to be much decayed by iniurie of time, ignorance of writers, and negligence of Printers. ³⁶

ここ数年、私はチョーサーを愛する、勿論この詩人がそれに値することは言うまでもないが、親しい紳士諸兄から、この類いまれな人物(チョーサー)への記憶をよみがえらせ、彼の作品集を修復すべく力を尽してほしいと求められた。というも、彼らは時の経過という傷、諸作家たちの無知、印刷者たちの怠慢のせいでチョーサーの作品がすっかり虫食い状態になったと判断しているからだ。

スペートの『チョーサー作品集』は、現代の *Riverside Chaucer* の雛形であり、チョーサー作品復刻に当該時代の解釈を加える画期的な事業だった。とりわけ注目すべきは、やはり、「古語について説明を付し」、巻末に “The old and obscure words of Chaucer, explained” (sign. Aaaa, i, - Bbbb, i^v) を付したことである。いわゆる、グロサリーを巻末に加え、古語・廃語となったチョーサー英語が再び人々の記憶に蘇り、解釈可能となった。しかし、彼の努力も一時的な引き止め策でしかなく、チョーサー英語の経年劣化に歯止めをかけることはできなかった。1602年の再版を最後に、それから85年後の1687年の第三版までチョーサー作品の全容が伝えられることはなかった。チョーサーにとって最も不幸な暗闇の時代だった。

16, 17世紀は宗教改革が推進され、ウィクリフ主義、ロラード派の再評価と復活が実現した時代だった。殉教者トーマス・ベケットの聖地 ‘Canterbury’ がもつ意義や、そこへの巡礼も宗教改革の荒波のなかで変質していった。つまり、‘Canterbury tale [s]’ が「長たらしい」、「くだらない」作り話という解釈はイギリス宗教改革を背景に生まれてきた。しかもそうした解釈の多くは宗教的言説の文脈にあることを確認できれば、その淵源は1407年8月7日（日曜日）にロラード派僧侶ウィリアム・ソープが、ケント州、ソールトウッド（Saltwood）城の一室でカンタベリー大司教トーマス・アランデル（Thomas Arundel）から異端審問に引き出された時の証言にさかのぼることができる。³⁷

アランデルは、ソープがかつてシュルーズベリで行った説教で、「巡礼を冒涇だとし、巡礼を愚劣な出費、財産の浪費だと告発している」ことを尋問した。³⁸ ソープは巡礼には正しい行為と偽りの行為の二種類あって、こう証言する：

I clepe hem trewe pilgrymes trauelynge toward pe blis of heuene whiche, in pe staat, degree or ordre pat God clepip hem to, bisien hem feipfulli...

‘And a3enward,’ I seide, ‘as her werkis schewen, pe moost parte of hem, bope men and wymmen, pat gon now on pilgrimage haue not pese foreside condiciouns, neiper louen to bisien hem feipfulli to haue hem. For, as I wel knowe, sip I haue ful ofte assaied, examine whoeuere wole and can twenty of pese pilgrims, and pere schulen not be founden ofte pree men or wymmen among pese twenty pat knowen prifuli oon heest of God, neiper pei cunnen seien pe Pater noster, neiper pe Aue neiper pe crede in ony manere langage....’

‘Also, sire, I knowe wel pat whanne dyuerse men and wymmen wolen goen pus aftir her owne willis and fyndingis out on pilgrimageyngis, pei wolen ordeyne biforehonde to haue wip hem bope men and symmen pat kunnen wel synge rowtinge songis, and also summe of pese pilgrims wolen haue wip hem baggepipis so pat in eche toun pat pei comen poru3, whatr wip noyse of her syngyng, and wip pe soun of her piping, and wip pe ginglyng of her Cantirbirie bellis, and wip pe berkyng out of dogges aftir hem, pese maken more noyse pan if pe king came pere away wip his clarioneris and manye oper mynstrals. And if pese men and wymmen ben a monche oute | in her pilgrimage, manye of hem an half 3eere aftir schilen be greet iangelers, tale tellers and yeris.’³⁹

祝福された天国へ旅する巡礼者こそ正しい巡礼者と呼べるのです。神が各巡礼者に割り当てる社会的身分、立場、序列に応じて、信仰心に突き動かされる巡礼者のことです。〈中略〉

それとは反対に、現状の巡礼者たちの行いが示してくれているように、男女ともに、現在巡礼に出る人たちのほとんどが、前に触れた諸々の条件を満たさず、巡礼をするのに信仰心に触発されたいとする人たちもほとんどいないのです。なんども自分で検証もしてきましたから、私にはよく分かっているのです。ですから、お望みの方、能力のおありの方、どなたでも、巡礼者二十人を試してご覧なさい。神が命じられたことの一つでもきちんとわかまえている巡礼者は二十人のうち三人とはいわないでしょう。どの言語でもいいから「主の祈り」や「アヴェマリアの祈り」、「使徒信経」を暗唱できるひとはいないでしょう。〈中略〉

司教殿、それに、私には分かっているのです。男女とわず、おおくの人たちが自発的意志や見識から巡礼に出ようとする時、騒々しい歌を上手に歌える人をあらかじめ選んで同行させようとします。また、なかには、みずからバグパイプを持参して、各町内を通過するとき、やかましい歌声、バグパイプの雑音、カンタベリー鈴のチリンチリン鳴る音、跡をつけて回る犬の吠え声で大きな騒音をたてていきます。その音たるや国王に帯同する吹奏楽隊やおおくの吟遊楽人の騒音よりも大きいくらいです。そして、この男女巡礼者たちが一ヶ月も巡礼に出れば、半年後には彼らのおおくが偉大なるほら吹き、むだ話屋、虚言屋に成長するでしょう。

カンタベリー大司教アランデルがソープを尋問する場面を見ると、まるでチョーサーの『カンタベリー物語』で審判役の「陣羽織亭の亭主」(the Host) が誓言乱発を咎める「教区主任司祭」(the Parson) に向かって発した言葉が想起される。亭主が「おやおやジャンキン殿、そこにおいでか。どおりであたりにもロラードの臭いがしますわい。(O Jankin, be ye there?! I smelle a Lollere in the wynd)」('Man of Law's Tale,' 1173) と言い放つ。問題は「教区主任司祭」がロラード僧かどうかではない。亭主の言葉の背景に、明らかに誓言乱発を告発するロラード派の言説に敏感になっている時代状況があることだ。上に引用したソープの証言はアランデルからの異端告発第三項 (article 3) にあたる「巡礼」にたいするソープの、そしてロラード派の言説である。『カンタベリー物語』の構造でもっとも重要な枠組みとなる「巡礼」が告発され、ソープとアランデルとの間の異端審問の争点に巻き込まれてでもいるかのような錯覚を覚える。

上記引用の第二段に、ソープは巡礼の規模を二十人と見積もっている。チョーサーの巡礼者は総勢で三十名。チョーサーの巡礼者も「主の祈り」(I, 3485, 3638)、「アヴェマリアの祈り」(VII, 508)、「使徒信経 (Crede)」(VIII, 1047) という言葉は知っていたが、内容まで暗唱できるものどれほどいたかははなはだ疑わしい。中世後期には「巡礼」が祝祭的集団と化していった。⁴⁰

上記引用の第三段は、もっとも直截で露骨にチョーサーを批判する言説である。⁴¹ ソープの「カンタベリー鈴」は巡礼用の護符 (badge) だが、同時に、洗神行為の象徴でもあった。まずやり玉にあがるのは『カンタベリー物語』「ジェネラル・プロローグ」の粉屋 (the Miller) で、「彼はバグパイプを吹いて演奏するのが上手で、それに合わせて皆を町から連れ出してくれました」という。⁴² 次も同じ「ジェネラル・プロローグ」で、「修道僧」(the Monk) が「馬に跨がっていると、爽やかに吹き渡る風に乗って馬鞍がチリンチリン鳴り響く音を人々は聞きました。まるで礼拝堂の鐘が鳴るかのような大きな音でした」という。⁴³ ロラードの臭いがする教区主任司祭の口を封じ、一行の眠気覚ましに利用されている。⁴⁴ また、聖職者にあるまじき「修道僧」の大声から「セント・ポールの鐘」(Seint Poules belle) を連想させ、さらにつづけて、「修道僧」が跨がる馬の馬鞍の四方八方に付けられた鈴がガチャガチャ鳴って、これも眠気覚ましの効果を発揮する。⁴⁵ ソープは巡礼に要する旅程を1ヶ月以上とし、半年後には巡礼者は話しの名手に成長すると皮肉まじりに言っているが、チョーサーの一行はわずか3日から4日のサザークからカンタベリーまでの旅程で、どの巡礼者も、聖俗いずれの語り物にせよ、第一級の話巧者ぞろいであった。⁴⁶

さらに言えば、ソープの「巡礼」批判は、1395年に国王リチャード二世が召集した議会開催に合わせて、ウェストミンスター修道院とセント・ポール大聖堂の扉に貼られた英文による声明文「十二の結論」(the Twelve Conclusions) の「第八の結論」を根拠にしている：

Pe viii. conclusium nedful to telle to pe puple be gylid is pe pilgrimage, preyeris, and offringis made to blynde rodys and to deue ymages of tre and of ston, ben ner of kin to ydolatrie and fer fro almesse dede. And pow pis forbodin ymagerie be a bok of errour to pe lewid puple, zet pe ymage usuel of Trinite is most abhominable. Pis conclusiun God opinly schewith, comanding to don almesse dede to men pat ben neddy, for pei ben pe ymage of God in a more liknesse pan pe stok or pe ston. . . . But we preye pe, pilgrim, us to telle qwan pu offrist to seyntis bonis enschrid in ony place, qwepir releuis pu pe seynt pat is in blisse, or pe pore almes hous pat is so wel enduwid. For men ben canonized, God wot how, and for to speken more in playn, trewe Cristemen supposing pat pe poyntis of pilk noble man pat men clepin seynt Thomas, were no cause of martyrdom. ⁴⁷

欺かれた人々に話しておく必要がある第八の結論は、木石でつくられた罪深い十字架と木偶の聖像に向けられる巡礼、祈祷、供物のことだ。いずれも、ほとんど偶像崇拜と変わりがありませんし、慈善行為とはほど遠い。禁じられた偶像は無知な人々にとって迷いの書というほどだが、三位一体を表象する聖像はこの上なく忌まわしいものだ。神ははっきりとこの結論を提示し、施物の慈善行為をするならそれを必要とする人たちにするように命じておられる。なぜなら、彼らこそ木石で作られた聖像以上に神の似姿に近いからだ。〈中略〉しかし、私たちは巡礼者のあなたに是非お願いしたい。あなたがいづこの場所であれ、まず、聖廟に安置された聖遺骨に捧げ物をする時、祝福された聖人なのか、あるいは十分な寄付を受けた救貧院のどちらがあなたを救ってくれるか私たちに教えて欲しい。なぜなら、神はどのようにして人が聖人に列せられのかをご存知で、はっきり言って、真のキリスト者なら、聖トーマス（・ベケット）と呼ばれるこの貴人の聖痕が殉教者とされた根拠ではないと考えるでしょう。

1395年のロラード派の巡礼告発「第八の結論」は1407年にThorpeによって理論化され、「聖トーマス・ベケット」、聖地「カンタベリー」、聖地巡礼という神聖化の連想は脱神聖化、反偶像崇拜の言説をまとっていく。

チョーサーの『カンタベリー物語』は巡礼という枠組みを彼の時代の社会そのものとして構築し、各社会階層が参加する社会の縮図になっている。その描写は決して一様でなく、特に、聖職者にたいするこの詩人の向き合いかたは、ウィクリフ主義、ロラード派の言説と通じ合う批判、皮肉を駆使している。既述の宿の亭主が「教区主任司祭」にロラード臭を嗅ぎとっていたように、チョーサー自身にもロラード派と共鳴するところが多くあったが、チョーサー英語が風化していく過程で、彼の描写の細かい濃淡は塗りつぶされ、『カンタベリー物語』が反宗教改革的目線から、「無駄話、つまらない話」の総体と解釈されていった。大航海時代の只中、日本の平戸にたどり着いたひとりのイギリス人の日記に書き留められ、1930年代の日本で大きな論争を巻き起こした‘a long Canterbury tale’は、母国イギリスにおけるチョーサー評価が大きく変質する文学史上の「大物語」の一コマだったのだ。

別表II

‘Canterbury (bels, story, tale [s] , trick)’ as an attributive usage		
Year (Printed/Published) adopted by [NED] , [S (purgeon)] , or [EBI]	Source of reference (Author/Work)	Category Definition
c1386 [NED]	Chaucer. Prol. (title) : Here bygynne the Book of the tales of Caunterbury.	Literature (a poetry)
1407 [EBI]	Thorpe, William. p. 64: ‘ [P] ilgrims,, wip noyse of her syngynge, and wip pe soun of her piping, and wip pe gingelynge of her Cantirbirie bellis’	Religion [EBI] : Referring to the impious pilgrimage.
1535 [S]	Layton, Richard. pp. 11-12: ‘We have visited Bath.... I send you a book of our Lady’s miracles, well able to match the Canterbury tales, which I found in the library.’	Religion [S] : a fable
1549 [S]	Becke, Edmund. p. 88: ‘If all magistrates & the nobilitie, wolde wel wey with them selfs the inestimable dignitie, & incomparable goodness of Gods boke,... and wolde also as willingly vouchsafe to suufurate & spare an houre or ii in a day, ... as they have been vsed to do in Cronicles & Canterbury tales, then should they also abandone ...all blasphemyes, swearing, carding, dysing.’	Religion [S] : a frivolous story

元和3 (1617) 年の 'a Canterbury tale'

1549? [S]	Cranmer, Thomas. p. 198: 'If we receiue and repute the gospel as a thing most true and goldy, why do we not live according to the same? If we count it as fables and trifles why do we take upon us to give such credit and authority to it? To what purpose tendeth such dissimulation and hypocrisy? If we take it for a Canterbury tale, why do we not refuse it?'	Religion [S] : a fable,
1549 [S]	Latimer, Hugh. pp. 106-107: '...if good life do not ensue and follow upon our reasoning, to the example of others, we might as well spend that time in reading of prophane histories, of Cantorburye tales, or a fit of Roben Hode.'	Religion [S] : a frivolous story
?a1550 [NED] [S]	Thorpe/Fox/C. William. I. pp. 167-168: 'Also sir... they will ordaine with them before, to have with them both men and women, that can well sing wanton songs; and some other p [P] ilgrims...with the noise of their singing, and with the sound of their piping, and the jangling of their Canturburie bells.' (Corrected from <i>NED</i> 's misprint)	Religion [NED] : In phrases referring to the pilgrims [S] : In the context referring to Chaucer's scheme of the <i>Canterbury Tales</i>
1565 [S]	Calfhill, James. fol. 134v: 'Therefore the friers coule must be honored. Ye remember what the hoste in Chawcer sayd to sir Thopas for hys leude ryme: the same do I say to you (bicauseI haue to be with your Cantorbury tales) for youre fayre reasons.'	Religion [S] a frivolous story
1575 [NED] [S]	Turberville, George. p. 260: 'a verie olde womans fable, or Cantorburie tale'	Secular Prose [NED] : a long tedious story [S] : a fable and a dull and long-winded fiction
1578 [S]	P [rocter] , T [homas] . sign. v: 'Yet amonge so manye bookes, as are written daylie, of dreames & fantacies...of pleasant metinges & fables amonge women, of Caunterbury, or courser tales, with diuers iestes, & vaine deuises: in earnest, there is least labour layd on that arte, wheareby, kinges rule....'	Secular Prose [S] : a frivolous story
1579 [NED] [S]	Fulke, William. p. 422: '...in verie deed a lewd lying counterfeiter of more then Caunterburie tales.'	Religion [NED] : a long tedious story [S] : a fable
1580 [S]	Lyly, John. p. 19: 'I cannot tell whether it be a <i>Canterbury</i> tale, or a Fable in <i>Aesope</i>'	Secular Prose [S] : a fable
1582 [S]	Stanihurst, Richard. No pagination: 'But oure Virgil not content wyth such meigre stuffe, dooth laboure, in telling, as yt were a <i>Cantorburye tale</i>'	Literature (in a kind of Stanihurst's preface) [S] : a fable?, though 'a Cantorburye tale' is omitted in the entry 'Canterbury story or Canterbury tale' of her Index (p. 8) .
1589 [NED] [S]	Greene, Robert. sign. f. 2v: 'Whosoeuer Samela descanted of that loue, tolde you a Canterbury tale'	Literature (romance) [NED] : a long tedious story [S] : a fable

1589 [NED]	Marprelate, Martin. p. 1: 'There is a canterbury trick once to patch up an acusation with a lye or two....'	Religion [NED] : applied by the Puritans to the hierarchical position of Canterbury, as <i>Canterbury trick</i>
1605 [S]	Dekker, Thomas, and Webster, John. sign. f 1r: ' <i>May [berry]</i> . A Commdy, a Canterbury tale smells not halfe so sweete as the Commedy I haue for thee old Poet: thou shalt write vpon't Poet.'	Literature (a comedy) [S] : a frivolous story
1606 [S]	Chapman, George? sign. E2, act III sc. 1: 'Will: I indeed Sir the best <i>Tales</i> in England are your Canterburie <i>tales</i> , I assure ye.'	Literature (a comedy) [S] : a fable?, though ' <i>Canterburie tales</i> ' is omitted in the entry 'Canterbury story or Canterbury tale' of her Index (p. 8) .
1607 [S]	C., R. ¶ 3r-3v: 'they (our ancestors) thought him (Herodutus) worthy to be read at the games of Olympus: these men reade him but as a Canterburie tale....'	Secular Prose (translation from Henri Estienne's French) [S] : a fable
1617 [EBI]	Cocks, Richard. I, p. 282: 'Giquans Kynsman, with an other fellow who cleamed 120 picos sappan of our wood, but had no papers to shew, but tould a longe Canterbury tale.'	Secular Prose [?NED] : a long tedious story
1621 [S]	Wither, George. sign. A 3b-A 4: 'To Any Body/ The foolish Canterbury Tale in my scourge of Vanity, (which I am now almost ashamed to read ouer) euen that, hath bin by some prayed for a witty passage'	Literature (in a kind of Wither's preface) [S] : a fable
1630 [S]	Unknown: The Epistle '...herein following the steppes of old Chaucer (the first Father of <i>Canterbury-Tales</i>)' (p. v) / (Head-title) ' <i>The Tinker of Turvey. or Canterburie Tales</i> ' (p. 9) / '...and because I thinke most of us are for Canterbury, we will call them <i>Canterbury Tales</i> .' (p. 11)	Literature [S] : the title identified with Chaucer's <i>Canterbury Tales</i>
1631 [S]	Brathwait, Richard. p. 119: 'Hee rides altogether upon spurre, and no lesse is requisite for his dull supporter; who is as familiarly acquainted with a Canterbury, as hee who makes Chaucer his Author, is with Tale'	Secular Prose [S] : a dull and long-winded fiction
1662/a1661 [NED/OEDOnline] 1662 [S]	Fuller, Thomas. p. 97: 'So <i>Chaucer</i> calleth his Book, being a collection of several <i>Tales</i> , pretended to be told by Pilgrims in their passage to the Shrine of Saint <i>Thomas</i> in Canterbury. But since that time <i>Canterbury Tales</i> are parallel to <i>Fabulae Milesiae</i> , which are characterized, <i>nec veræ, nec versimiles</i> , meerly made to marre precious time, and please fanciful people'	Secular Prose [NED] : a long tedious story [S] : a fable

Primary Sources:

c1386: Chaucer. Benson, Larry D. *The Riverside Chaucer*, 3rd edition. Boston, 1987.

1407: Thorpe, William. Hudson, Anne. *Two Wycliffite Texts: The Sermon of William Taylor 1406, The Testimony of William Thorpe 1407*, "EETS OS" 301. Oxford, 1993.

- 1535: Layton, Richard. Gairdner, James. 'No. 42. Richard Layton to Cromwell' in *Letters and Papers, Foreign and Domestic, of the Reign of Henry VIII*. Preserved in the Public Record Office, the British Museum, and Elsewhere in England. London, 1886. Volume IX.
- 1549: Becke, Edmund. Spurgeon, Caroline F. E. '1549. Becke, Edmund. *Preface* to Becke's edition of the Bible, fol. 1549, sign. A A vi.' in Spurgeon, 'Part I Text 1357-1800' in *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion (1357-1900)*. The Chaucer Society, 2nd series. No. 48. London, 1914; Caroline F. E. *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion (1357-1900)*. 3 vols. Cambridge, 1925. I, p. 88.
- 1549?: Cranmer, Thomas. Cox, John E. 'A Sermon concerning on the time of Rebellion' in *the Works of Thomas Cranmer, Archbishop of Canterbury, Martyr, 1556*. 2 vols. Cambridge, 1846. II, pp. 190-202.
- 1549: Latimer, Hugh. George, E. Corrie. 'To the Reader in the Second Sermon of Master Hugh Latimer' in *Sermons by Hugh Latimer, Sometime Bishop of Worcester, Martyr, 1555*. 2 vols. Cambridge, 1844. I, pp. 104-111.
- 1550: Thorpe/Fox/C. Wordsworth. Wordsworth, Christopher. 'William Thorpe; compiled from Fox's Acts and Monuments (Edit. 1610)' in *Ecclesiastical Biography; or Lives of Eminent Men, Connected with the History of Religion in England; from the Commencement of the Reformation to the Revolution; Selected and Illustrated with Notes*. 6 vols. London, 1810, 1818. I, pp. 107-212.
- 1565: Calfhill, James. Calfhill, James. An Avnswere/ to the Treatise/ of the Crosse:/ wherein ye shal see by the plaine /and vndoubted word of God, the va-/nities of men disproued: by the true/ and Godly Fathers of the Church,/ the dreames and dotages of other/ controlled: and by lavvfull Coun-/sels, conspiracies ouerthrowen./.../Imprinted at Lon-/don, by Henry Denham, for/ Lucas Harryson./ Anno. 1565.
- 1575: Turberville, George. Turberville, George. The Booke of Faulconrie or Hau-/king, For The Onely De-/light and pleasure of all Noblemen and Gentlemen:/ Collected out of the best authors, as well Italians as Frenchmen,/ And some English practices withal concerning Faulconrie, the contentes/ Whereof are to be seene in the next page folowyng./ By George Turberuile Gentleman./ Nocet Empta Dolore Volvptas./ Imprinted at London for Christopher Backer, at the signe of/ the Grashopper in Paules Churchyarde. Anno. 1575.
- 1578: P [rocter] , T [homas] . P [rocter] , T [homas] . Of the knowledge/ and conducte of warres, two books,/ latelye written and sett foorth, profi-/table for suche as delight in Hys-toryes, or martyall affayres,/ and necessarye for/ this present/ tyme./.../ ¶ In aedibus Richardi Tottelli, vij, die/ Iunij. Anno Domini, 1578.
- 1579: Fulke, William. Fulke, William. D. Heskins,/ D. Sanders, And/ M. Rastel, accounted (among/ their faction) three pillers and/ Archpatriaches of the Popish Synagogue,/ (vtter enemies to the truth of Christes Gospell,/ and all that sincerely professe the same) / euerthrowne, and detected of their/ seuerall blasphemous/ heresies./ By D. Fulke, Maister of Pembrooke/ Hall in Cambridge./ Done and directed to the Chaurch of England, and/ all those which loue the trueth./ At London,/ Printed by Henrie Middleton/ for George Bishop./ Anno. 1579.
- 1580: Lyly, John. Lyly, John. Euphues and his England,/ Containing./ his voyage and aduentures, mixed with/ sundry pretie discourses of honest/ Loue, the description of the/ contrey, the Court, and/ the manners of/ that Isle./ Delightful/ to be read, and nothing hurtfull to be regarded:/ wherein there is small offence by lightnesse/ gluen to the wise, and lesse occasion/ of loosenes proffered to/ the wanton./ By Iohn Lyly, Maister/ of Arte./ Commend it, or amend it./ Imprinted at London/ for Gabriell Cawood, dwelling in/ Paules Church-yard./ 1580.
- 1582: Stanihurst, Richard. Stanihurst, Richard. *Thee First Fovre Bookes of Virgil his Aeneis Translated intoo English heroical verse by Richard Stanyhurst, wyth oother Poëtical diuises theretoo annexed*. Imprinted at Leiden in Holland by Iohn Pates. Anno M.D.LXXXII.
- 1589: Greene, Robert. Greene, Robert. Menaphon/ Camillas alarum to/ slumbering Eupheues, in his/ melanchokie Cell at Si-/lexedra./ Wherein are deciphered the variable effects/ of Fortune, the wonders of Loue, the tri-/umphes of inconstant Time./ Displaying in sundrie conceived passions (fig-/red in a continuate Historie) the Trophees that/ Vertue carrieth triumphant, maugre/ the wrath of Enuie, or the reso-/lution of Fortune./ A worke worthie the youngest eares/ for pleasure, or the grauest censures/ for principles./ Robertus Greene in Artibus magister./ Omne tulit punctum./ London/ Printed by T. O. for Sampson Clarke,/ and are to be sold

- behind the Roy-/all Exchange. 1589.
- 1589: Marprelate, Martin. Marprelate, Martin. Hay any worke for Cooper: /Or a briefe Pistle directed by Waye of an/ hublication to the reverende Byshopps, counselling them/ if they will needs be barrelled vp, for feare of smelling/ in the nostrels of her Maiestie, and the State, that they would/ vse the aduise of reuerend Martin, for the prouiding of their/ Cooper. Because the reuerend T. C. (by which misticall/ letters, is vnderstood, eyther the bousing Parson of/ Eastmeane, or Tom Coakes his Chaplaine) [*hath shewed himself in his late Admo-/nition to the people of England*] to bee an vnskillfull/ and a beceyfull/ tubtrimmer./ Wherein worthy Martin quits himselfe like a man/ I warrant you, in the modest defence of his selfe and his learned Pistles, and makes the Coopers hoopes/ to flye off, and the Bishops Tubbs to/ leake out of all crye./ Penned and compiled by Martin the Metropolitan./Printed in Europe, not far from some of the Bousing Priestes, [Printed at the White Friars in Coventry, March, 1589] .
- 1605: Dekker, Thomas, and Webster, John. Dekker, Thomas, and Webster, John. North-VVard/ Hoe./ Sundry times Acted by the Children/ of Paules./ By Thomas Decker, and/ Iohn Webster./ Imprinted at London by G. Eld./ 1607.
- 1606: Chapman, George? Chapman, George? *Sir Gyles Goosecappe, Knight*. A Comedie presented by the Chil [dren] of the Chappell. At London: Printed by Iohn Windet for Edward Bunt. 1606.
- 1607: C., R. C., R. ‘The Epistle Dedicatorie To The Right Honorable Lords, William Earle of Pembroke: Philip Earle of Montgomerie: Patrons of learning: patterns of Honor’ in A World/ Of Wonders:/ Or/ An Introdvetion To A/ Treatise touching the Conformitie of ancient/ and modern wonders:/ Or/ A Preparatiue Treatise to the Apologie/ for Herodotvs./ *The Argument whereof is taken from the Apologie for/ Herodotvs* written in Latine by Henrie Sth-/phen, and continued here by the Author himself./ *Translated out of the best corrected French copie./ .../ London,* Imprinted for Iohn Norton./ 1607.
- 1617: Thompson, E. Maunde. Thompson, E. Maunde. *Richard Cocks, Cape-Merchant in the English Factory in Japan, 1615-1622 with Correspondence*. 2 vols. “Works issued by The Hakluyt Society” Nos. 66-67. London, 1883. 2 vols. I.
- 1621: Wither, George. Wither, George. Wither’s Motto./ *Nec habeo, nec Careo, nec Curo.* London printed for Iohn Marriott 1621.
- 1630: Unknown. Unknown. *The Tinker of Turvey, his merry Pastime in his passing from Billins-Gate to Graves-End*. London. Printed for Nath: Butter, dwelling at St. Austin’s Gate. 1630. in James O. Halliwell ed., *The Tinker of Turvey, or Canterbury Tales: An Early Collection of English Novels*. London, 1859.
- 1631: Brathwait, Richard. Brathwait, Richard. Whimzies: Or, A New Cast of Characters./ *Nova, non nota delectant.* London, Printed by F. K. and are to be sold by Ambrose Rithir/don at the signe of the Bulls/head in Pauls Church-yard. 1631.
- a1661/1662: Fuller, Thomas. Fuller, Thomas. The History Of The Worthies Of England/ Endeavoured by Thomas Fuller, D. D. /London, Printed by J. G. W. L. and W. G. MDCLXII.

注

1. 文久元年季夏新栞 英國慕維廉著『英國志』「英國志卷之四」(長門温知社蔵梓)、四十八丁裏。豊田實『日本に於ける英文學研究』(岩波書店、昭和7年)、9頁；同『日本英學史の研究』(岩波書店、昭和14年)、364頁。
2. Thomas Milner, *The History of England: From the Invasions of Julius Caesar to the Year A.D. 1852* (London: The Religious Tract Society, 1853), p. 314.
3. 官許明治庚午初冬新刻 中村正直譯『英國斯邁爾斯著原名自助論一千八百六十七年倫敦出版 西國立志編』駿河國静岡藩木平謙一郎蔵版 第九編「職事ヲ務ムル人ヲ論ズ」三「職事ヲ務メ、兼テ文學ニ名ヲ得タル人ヲ擧グ」、三丁表。
4. Samuel Smiles, *Self-Help; With Illustrations of Character, Conduct and Perseverance* (New York, 1866), “Chapter IX Men of Business,” p. 252.

5. John Dryden, *Fables Ancient and Modern, Translated into Verse from Homer, Ovid, Boccace & Chaucer: With Original Poems, Preface* (London: Printed for Jacob Tonson, within Gray’s Inn Gate next Gray’s Inn Lane, MDCC), sign. *B2.
6. 石井研堂『自助の人物典型 中村正直傳』(成功雜誌社、明治40年)、57頁。
7. *English History* “New Reading Series” Published under the Direction of the Committee of General Literature and Education, Appointed by the Society for Promoting Christian Knowledge (London, ?1858), p. 59. 渡部一郎(温) 翻刻『英國史略』乾坤(明治三庚午官許、渡部氏蔵板); 見開き頁にNEW READING SERIES ENGLISH HISTORY./.../ LONDON: PRINTED BY W. CLOWES AND SONS./ NUMADZ: REPRINTED BY W. N. & CO./ 1870と印字。
8. *The History of England* “Historical Series” No. 1. Published under the Direction of the Committee of General Literature and Education, Appointed by the Society for Promoting Christian Knowledge (London, 1854), p. 56.
9. 河津孫四郎譯述『西洋易知録』全四卷(官准 知新館蔵板、明治己巳年新鑄)「卷之四附記」、二十二丁表、二十三丁表。
10. William Francis Collier, *The Great Events of History from the Beginning of the Christian Era till the Present Time* (London: T. Nelson and Sons, Paternoster Row, 1860), p. 140.
11. 昭和4年3月23日付大阪朝日新聞夕刊二面。
12. 武藤長藏「日英交通史概観」『開國文化』(朝日新聞社、昭和4年)、446頁。本文中「Edward Maunde Thompson 編纂Diary of Richard Cocks」とは、Edward Maunde Thompson ed., *Richard Cocks, Cape-Merchant in the English Factory in Japan, 1615-1622 with Correspondence*. 2 vols. “Works issued by The Hakluyt Society” Nos. 66-67. London: the Hakluyt Society (New York: Burt Franklin), 1883のこと。また、日本でも村上直次郎がトンプソン版の翻刻本Murakami, Naojiro ed., *Diary of Richard Cocks: Cape-Merchant in the English Factory in Japan, 1615-1622: with Correspondence*. Japanese Edition. 2 vols. Tokyo: Sankosha, 1899を出版している。
13. Thompson, I, p. 282.
14. 豊田實『日本に於ける英文學研究』、6頁。
15. 竹村覺「徳川時代の英文學」、202頁、205頁。また、『日本英學發達史』、168頁注(1)で豊田説を異説としている。なお、竹村は武藤の「日英交通史概観」(『開國文化』所収)を参照しているにもかかわらず、武藤の‘Canterbury tale’論には一貫して触れていない。また、皆川三郎は竹村と豊田の間といった立ち位置で、次のように解釈している：

A long Canterbury tale: Chaucer 作14世紀末の長詩で Canterbury の St. Thomas à Becket への参詣者が語った話から成る The Canterbury Tales から来たにせよ、ここではただ長たらしい、むだ話ぐらいのところ。ただ英商館長が、このことばを持ち出したことは言語的に極めて興味深い。原作を読んだかどうかかわからないが、少なくとも聞いていたことであろう。

(〈別表I〉(21)、227頁)

16. Georg Borchardt, *Schreibung, Aussprache und Formenbau im Tagebuch des Richard Cocks (1615-1622)* (Gießen: Druck von Justus Christ, 1925), p. 4: “Daß er Chaucer kennt, ergibt sich aus einer Aufzeichnung vom 21. Juli 1617: ‘The kinges brother...sent for me to make an end of my processe with the scrivano of Giquan, whome I fownd...but tould a longe Canterbury tale.’”
この論文は『コックス日記』の英語を理解するために綴字、発音、語形成を細かく調べ、NEDから7箇所を利用しているが、‘Canterbury tale’については見落としてしまったようだ。
17. 上掲書は、豊田実の旧蔵「日本英学筑紫文庫」(現九州大学図書館所蔵)にはなく、日本では現在東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室「市河文庫」に所蔵されているのみである。同図書室によれば、「市河文庫」は市河三喜旧蔵の言語学・英語学関係洋書を昭和22年から24年の間に東京大学が受け入れたことで設置され、同書はその一冊だったという。とすれば、豊田は市河三喜の自宅の書棚で参考にしたのだろう。豊田實『日本英學史の研究』、359-360頁。なお、「市河文庫」の背景については、寺澤芳雄「VIII 市河三喜と日本の英学」『明治・大正の学者たち』東京大学公開講座26(東京大学出版会、1978年)、269-271頁に詳しい。
18. たとえば、皆川三郎はWilliam AdamsやRichard Cocksらエリザベス朝時代の著作物を理解するために、「同志社

大学木村俊夫、齋藤勇両博士といったシェイクスピア、中世英文学の専門家」の助言を求め、Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon* や C. T. Onions, *A Shakespeare Glossary* を使用している。「William Adams 研究－日英における評価と人間 Adams」『英学史研究』1975 卷（1974）7 号、1 頁；上掲書『平戸英国商館日記』、i 頁）さらに、わざわざ「IX COCKS の英語」という一章をもうけて、Elizabethan 期、Jacobean 期英語を詳しく説明している。（『平戸英国商館日記』、xxviii-xxxvii 頁）

19. 無記名【海老注：上田が編集者として】「大辭書の出版」『帝國文學』第 1 卷 11 号（明治 28 年 11 月）、脇頁 113（/肩頁 233）—114（/234）頁；柳村【海老注：上田の筆名】「英辭書の古今」『帝國文學』第 6 卷 9 号（明治 33 年 9 月）、脇頁 51（/肩頁 967）—59（/975）頁。つづいて、『英語青年』の前身誌『青年』4 卷 6 号（明治 33 年 10 月）「書架」欄（14 頁）に「一は“A New English Dictionary on Historical Principles”を指すものにして誠に英語界未曾有の大出版物と云ふべきものなり」という簡単な紹介記事。次に、同誌 4 卷 9 号（同年 11 月）「書架」欄（14 頁）に *NED* の公式書名 *A New English Dictionary on Historical Principles* を邦訳した「歴史的英語新字典」について続報掲載。
20. 引用は『英語青年』27 卷 8 号（明治 45 年 7 月）「雑録」、254 頁。また、豊田を *NED* へ導いた研究手法は恩師ジョン・ロレンス（John Lawrence）によるものであり、「私は英文学の語学的研究の道を先生から授った」と書いている。（『私の歩いて来た道：人生と信仰』[松柏社、昭和 48 年]、79 頁）また、市河三喜もロレンスを通して *NED* に導かれたことや、*NED* 完成の歴史的背景を詳細に明かしている。しかし、ロレンスと *NED* 編集事業との因縁について触れられることはなかった。（「N. E. D. の完成」『英文學研究』第八卷第四、620-624 頁）

ここでロレンスにまつわるエピソードを紹介しておく。彼の来日のきっかけである。1894（明治 27）年 8 月、オックスフォード大学出版局代表団はロレンスから辞書編集に加わりたい旨の志願書を受取っている。彼にはジェームズ・マレー（James Murray）、ヘンリー・ブラッドリー（Henry Bradley）の後任第三代編集主幹になる期待があった。2 ヶ月間、編集実務にもたずさわった。ところが、ブラッドリーによる手厳しい評価のせいで、ロレンスの希望が実現することはなかった。その結果、1906（明治 39）年に彼は日本へ行くことになる。経緯は以下に詳しい：

In August (1894) the Delegates had received an application for work on the Dictionary from the English scholar John Lawrence, who evidently came with strong recommendations; he had started trial work by October, with a view to his eventually becoming a third Editor. Unfortunately he soon proved not to be up to the work, and following a damning assessment of his work by Bradley his services were soon dispensed with....

[Footnote] ...Lawrence subsequently held the chair of English literature at Tokyo Imperial University.

(Peter Gilliver, *The Making of the Oxford English Dictionary* [Oxford, 2016], p. 237)

ロレンスについては市河三喜らによる数多くの記事や人名辞典の類がある。そのうち、筆者は、東京帝国大学理科大学教授藤沢利喜太郎による、どこか奥歯にものが挟まったような口吻にずっと疑問を抱いていた。「Lawrence 君が小泉（八雲）氏の後任として始めて我國に渡來せられたる其折りの君の境遇が如何に難儀なりしか、而して君が如何に善く此難局を切り抜けれしかを語らんが爲めなり、尤も君自身は周囲の事情が君を斯くの如き難局に置きたることを感知せられざりしならん」。（「John Lawrence 博士葬送の日によもすがら睡られぬ折の記」『英語青年』36 卷 3 号 [大正 5 年]、88 頁）「難儀、難局」は一部の人のみ知られていたのだろう。ロレンス来日の直接のきっかけは、*NED* 編集への道を断たれた挫折だったのだろう。

21. 武藤長藏「初期日英交通史の重要文献」、〈別表 I〉(12)、65, 71 – 72 頁、および同『日英交通史之研究』、〈別表 I〉(14)、633, 638 – 640 頁。
22. *The Academy*, Dec. 22, 1888, Notes and News, vol. xxxiv, p. 403. チョーサー評価史の資料収集はファーニヴァルの発案で、スパージョンが 1901 年にファーニヴァルと直接会って実現することになる。注 24 の Part VI; Introduction. 55 (1924), 'Foreward,' p. v を参照。
23. Spurgeon, TRIAL LIST, p. 1. 本書は、恐らくは、稀本、珍本の類かも知れない。表紙につづく見開きのタイトル頁右肩に 'Incomplete Specimen.' の印字、p. vi の下部に 'Second Series. No. 33' / RICHARD CLAY & SONS, LIMITED, LONDON & BUNGAY の印字がみえる。著者スパージョン自身の判断で自著リストから外されたのか不明である。さらに、現在のチョーサー協会叢書では 'No. 33' は、C. F. E. Spurgeon ed., *Richard Brathwait's*

Comments, in 1665, upon Chaucer's Tales of the Miller and the Wife of Bath ‘The Chaucer Society, Second Series’ No. 33 (London: Published for the Chaucer Society by Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., 1901) に差し替えられている。TRIAL LIST からの差し替え、変更にあたり、何が起こっていたのか不明。しかも、この稀本が日本の市河の手元に届いていた経緯はさらに謎。

24. Spurgeon ed., *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion (1357-1900)*. [Part VI:] Introduction. “The Chaucer Society, Second Series” No. 55 (London: Published for The Chaucer Society by Kegan Paul, Trench, Trübner, 1924) , p. x; ‘Introduction’ in *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion 1357-1900*. 3 vols. (Cambridge: Cambridge University Press, 1925; New York: Russell & Russell, 1960) I, p. x.
 なお、分冊版は全7冊刊行され、他の6冊は、(1) Part I; Text 1357-1800. No. 48 (1914) ; (2) Part II; Text 1801-1850. Nos. 49 & 50 (1918) ; (3) Part III; Text 1851-1900. No. 52 (1921) ; (4) Part IV; Appendix A. Additional English and Latin References. No. 53 (1922) ; (5) Part V; Appendix B ‘The Reputation of Chaucer in France, French References’ and Appendix C ‘German References’ No. 54 (1922) ; (6) Part VII; Index. No. 56 (1924) となる。さらに、7分冊版は後に合冊され、3巻本として刊行される ; Caroline F. E. Spurgeon ed., *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion 1357-1900. With Twenty-four Colotype Illustrations, Introduction, Notes, Appendices and General Index* 3 volumes (Cambridge: at the University of Cambridge, 1925; New York: Russell & Russell, 1960) . 後に、その類書はチャウサー評価史拡大版として、Derek Brewer ed., *Geoffrey Chaucer: the Critical Heritage: Volume I 1385-1837; Volume II 1837-1933* 2 vols. (London, 1978) へ引き継がれた。
25. Part VII; Index, and ‘Index’ in vol. III, p. 8
26. OEDOnline は見出語分類法を変え、大見出を ‘Canterbury, adj. and n.’ とし ‘A. adj. attributive.’ の項に従来の NED/OED の (a) , (b) , (c) 三分類と使用年、使用例を掲げている。
27. スパージョンの見出語 ‘Canterbury story, or Canterbury tale’ については、上掲注25を参照。なお、スパージョンがIndex中の見出語に語義解釈を施しているのはここだけである。さらに、‘1535. Layton, Richard. Letter to Thomas Cromwell’ の使用例 ‘the Canterbury Tales’ について、同Index ‘Layton, R’ (p. 58) でわざわざ ‘Layton, R speaks contemptuously of C.T. in a letter to Thomas Cromwell’ と注記している。同様の注記は ‘1549. Becke, Edmund’, ‘1549. Latimer, Hugh’, ‘1575. Turberville, George’, ‘1578. Procter, Thomas’ にも見られる。また、見出語 ‘Wordsworth, C., *Ecclesiastical Biography*, 1810’ については、同Index, p. 85を参照。
28. NEDが初出年を ‘?a1550’ と推定した根拠をここに示しておく。C. Wordsworth *Eccl. Biog.* (1818) はその目次で ‘William Thorpe; compiled from Fox’s Acts and Monuments (Edit. 1610)’ であると明示している。この ‘Fox’s Acts and Monuments (Edit. 1610)’ とは、John Foxe ed., ‘William Thorpe’ in ACTES/ AND MONV-/MENTS OF MATTERS/ .../ Now againe, as it was recognized, perused, and recom-/mended to the studious Reader by the Author, Master *John Foxe*: the sixth time newly imprinted, with certaine/ additions thereunto annexed: Anno 1610./ Mense Octobris./ APOC.VII./ Salus sedenti superthionum & agno./ AT LONDON,/ Printed for the Company of Stationers./ Anno Domini, 1610. のことである。フォックスの1610年版は初版1563年以降、1570年、1576年、1583年と版を重ねてきたものである。さらにフォックス1563年版の出典は、1530年にウィリアム・ソーブの証言集がはじめて刊本として出版されたWilliam Thorpe, *The Examinacion of Master W. Thorpe preste accused of heresy before Thomas Arundell, Archebishop of Ca[n]terbury, the yere of ower Lord. MCCCC. and seuen. The examinacion of the honorable knight syr Iho[n]n Oldcastell Cobham, burnt bi the said Archebisshop, in the fyrste yere of Kynge Henry the Fyfth* edited by William Tyndale? or George Constantine? (Antwerp: J. van Hoochstraten, 1530) にさかのぼる。したがって、NEDの初出年 ‘?a1550’ とは、正確には ‘1530’ ということなる。
29. Anne Hudson ed., *Two Wycliffite Texts: The Sermon of William Taylor 1406, The Testimony of William Thorpe 1407* “EETS OS” 301 (Oxford: Oxford University Press, 1993) .
30. 筆者は2022年7月にthe Editorial Team OED へ、関係資料を添えて修正依頼をしている。
31. Joseph Addison ed., *Roger Ascham Toxophilus, 1545* “English Reprints” carefully edited by Edward Arber (London, 1868) , pp. 52-3, 54. なお、‘the Pardoner’s Tale’ からの引用文中594行目は *Riverside Chaucer* では ‘Of catel and of tyme; and forthermo,’ となっている。(下線部筆者)
32. John Foxe ed., THE FIRST [SECOND] / Volume of the/ Ecclesiasticall history contay-/nyng the Actes and

Monumentes/ of thynges passed in euery kynges tyme/ in this Realme.../ Newly recognised and inlarged/ by the Author Iohn FoXe./ AT LONDON/ Printed by Iohn Daye, dwellyng/ ouer Aldersgate./ ¶ These Bookes are to be sold at hys/ shop vnder the gate./ 1570. ¶ Cum gratia & Priuilegio Regiæ Maiestatis. 2 Volumes, II, pp. 1004-1005. ただし、フォックスのチョーサー評価は深刻な誤解から生じている。1570年版に‘¶ A treatise of Geoffrey Chawser intituled Iacke vplande’ (p. 350 [341]) とあるように、‘I [J] acke v [U] plande’をチョーサー作とし、托鉢修道会への批判を含む反カトリックの考え方に立つ作品『農夫ピアース信教』(Pierce the Plougmans Crede)の続き物とした。この2作品は、フォックスに先行してすでに1536年のジョン・ゴッホ(John Gough)、1602年のスペートの第二版、1721年のジョン・ウリー(John Urry)の刊本『チョーサー作品集』に収載され、誤解が引き継がれていった。(See P. L. Heyworth ed, *Jack Upland: Friar Daw's Reply and Upland's Rejoinder* [Oxford, 1968], pp. 1-53)

33. スパージョンの使用例は孫引きで、F. A. Gasquet ed., *Henry VIII and the English Monasteries*, 1899 を典拠とし、“Ye shall herewith recieve a bok of Our Lady’s miracles well able to match the Canterbury Tales. Such a book of dreams as ye neuer saw, which I found in the library” としている。(Spurgeon, I, p. 81; 下線部筆者)
34. 筆者は *the Matthew Bible* のベッケ版聖書原本を閲覧できなかったため、スパージョンの使用例にしたがった。(Spurgeon, I, p. 88; D. Brewer, I, p. 102)
35. 筆者は Peter Ashton transl., *A shorte treatise upon the Turkes Chronicles* (1546) 原本を閲覧できなかったため、スパージョンの使用例にしたがった。(Spurgeon, I, 87; D. Brewer, I, pp. 101-102)
36. Thomas Speght ed., *The Workes of our Anti-/ent and learned English Poet,/ Geffrey Chavcer,/ newly Printed./ In this Impression you shall find/ these Additions:/ Printed by Adam Islip, at the charges of/ Bonham Norton. Anno 1598, fol. 2v.*
37. Anne Hudson, *op.cit.*, p. 29: ... [O]n pe Sondai next aftir pe feste of seint Petir pat we clepen Lammasse, in pe 3eer of oure Lord a pousand foure hundrid and seuene, I William of Thorp, beyng in pe prisoun in pe castel of Saltwode, was brou3t bifore Tomas of Arnedel, Archebishchop of Cauntirbirie and chaunceler panne of Ynglond.
38. Anne Hudson, *op.cit.*, p. 61: ‘And panne pe Archebisshop seide to me, “What seist pou now to pe pridde poynt pat is certefied azens pee, preching at Schrouesbirie opinli pat pilgrimage is vnleeful? And ouer pis pou seidist pere pat po men and wymmen pat goen on pilgrimage... ben acursid and maad foolis spendi [n] ge her goodis in wast.”’
39. *Ibid.*, pp. 61-62, 63-64.
40. Jonathan Sumption, *Pilgrimage: An Image of Mediaeval Religion* (Totowa, New Jersey, 1975), p. 196.
41. ハドソンはこの第三段の引用箇所について、『カンタベリー物語』に托された巡礼や巡礼者の動機が含まれているとしている。See Ann Hudson, *op. cit.*, pp. 122-123.
42. I, 565-566: ‘A baggepipe wel koude he blowe and sowne,/ And therwithal he broghte us out of towne.’ *Riverside Chaucer* は注釈で粉屋のバグパイプについて、アランデルとソープの論争について言及している。(Note to 565, p. 821)
43. I, 169-171: ‘And whan he rood, men myghte his brydel heere/ Gynglen in a whistlyng wynd als cleere/ And eek as loude as dooth the chapel belle...’ *The Riverside Chaucer* は注釈でこの ‘Gynglen’ とソープの ‘pe gingelynge of her Cantirbirie bellis’ との同質に言及している。(Note to 169-170, p. 806)
44. II, 1185-1186: ‘I schal clynken you so mery a belle,/ That I schal waken al this compaignie.’
45. VII, 2780-2781, 2794-2795: ‘by Seint Poules belle!/ ...this Monk he clappeth lowde’; ‘For sikerly, nere clynkyng of youre belles/ That on youre bridel hange on every syde...’
46. John S. P. Tatlock, ‘The Duration of the Canterbury Pilgrimage’ *PMLA* Vol. 21 No. 2 (1906), 478-485. また、中世ヨーロッパの巡礼の旅程については、Jonathan Sumption, *op. cit.*, pp. 168-210.
47. H. S. Cronin, ‘The Twelve Conclusions of the Lollards,’ *The English Historical Review* 22 (1907), pp. 300-301. また、ラテン語版については、Walter W. Shirley ed., *Fasciculi Zizaniorum: Magistri Johannis Wyclif cum tritico. Ascribed to Thomas Netter of Walden* “Rolls Series” (London: Longman, Brown, Green, Longmans, and Roberts, 1858), pp. 360-369 を参照。

なお、本稿は令和4年6月11日、日本中世英語英文学会西支部例会での同名の発表原稿を元としている。